

研究連絡誌の創刊にあたって

研究部長 白石 竹雄

当センターの組織の拡充は目ざましいものがあり、技術職員数についてだけ見ても、昭和50年度の21名から今年度はその4倍近い人員をかぞえるまでとなった。それとともに機構の充実もはかられ、円滑な調査研究活動が進められている。反面これだけ大きな組織になると、職員間における交流、親睦をはかることが困難となっているのも事実である。特に日常、各班、各事業所ごとに独立して作業しているため、班が異なる者同士の交流はきわめて困難である。また、センター設立から8年を経過し、毎年新採用職員が加入し世代の幅が広がるにつれ、世代をこえて相互に知りあうこともむづかしい状況となってきた。

このような状況から、親睦会などにおいて相互交流の場が設けられ、酒をくみかわしたり、スポーツを共にするような中で、親睦を深めるような配慮が行われてきた。確かにその成果は顕著であり、今後もこのような活動が有効に行われることを期待するものであるが、親睦行事においては事務職員も含めた中での人間的なつながり、融和が第1の目的であり、同じ学問を志すもの同士のまじわり、相互研鑽という側面はあまり望めない。例えば、新しく仲間になった調査員がどのような学問的テーマにとりくみ、どのような問題意識を抱いているのかといった、学問的な面での関心に回答が得られる機会はほとんどないと言える現状である。

かつて古墳時代勉強会、縄文時代勉強会といった私的サークルが調査員間で自発的に結成され、相互の交流、研鑽に一定の役割りを果たしたことがあった。いつのまにか自然消滅してしまったようだが、それは遠隔地に散ったものが作業終了後遠路集まらなければならないといった、会を存続させるための努力が、日常の業務となかなか両立しないためであったと思う。しかし、短期間ではあったが、こうしたサークル活動の中で各人の学問的テーマや方法を知ることができ、また、未知の資料や研究成果を知り得たことは非常に有益であったと評価される。このようなサークル活動にかかわるものが何かあれば、非常に有益なのではないだろうか。

このような観点から、今回、研究論文等を自由に発表できる場としての、当センター刊行の新しい研究誌を刊行することとした。現在、考古学関係の学術雑誌が多数存し、当センターにも研究紀要が存在する。しかし、そこに掲載されるためには高度の学術水準が保たれていなければならないし、われわれの日常の調査研究に即した個別的論題は、それらになじまない場合も多い。われわれの自由な主題による論考を継続的に発表するためには、やはり自分たちで運営する機関誌が必要である。そこでならば、瑣末と見られるかもしれない個別事象の検討であっても、また、多少掘り下げの足りない論証であっても、あえて発表して大方の叱正を得ることが可能である。

学窓をはなれて間のない若い調査員にとっては、論文をまとめる、或いは文章を書く訓練の場として格好であり、このことが当センターの調査・報告書や研究紀要のレベルアップにつながることを期待したい。

いずれにしろ発表された論考をめぐる、センター内部で話題は尽きないと思われるし、学問

的議論の素材になることと思われる。新しい資料や方法が提示されればそれだけで勉強になろう。

今日、当センターの調査研究活動においては調査水準の均質化が望まれ、一定の水準を保った調査を行い、一定の水準を保った報告書を刊行することが要請されていると言える。その水準が年々高いものになるよう組織としての努力が続けられているが、その方向の中では個人の飛躍した見解の提示などは必ずしも好ましくなく、平均点的な内容であることが望まれている。こうした方向性は調査研究活動の主体がセンターという組織である以上当然のことであり、より高い平均点を求めて今後もこの方向で進むべきかと思われる。

こうした流れの中では、報告書の記載において言わば没個性的とならざるを得ない。事実記載に終始し、自分なりの考察をつけ加えることも、時間的余裕がないこともあって多くはない。このような現実を考えると、一個の考古学研究者としての見解を披瀝し得る場が、どこかになければならないように思われる。新しい研究誌を、自分が担当した調査に関する考察を改めて行える場としても利用することは、意義のあることと思われる。日常の調査活動における没個性化傾向（言葉が適当でないかもしれないが）に対して、個性的な精神活動の発揚の場としても、新研究誌を位置づけたい。そのようであればこそ、相互交流、親和の実もあがるものと言えよう。

このように、これから刊行して行こうとする連絡誌の効用は大きなものと思われる。そして本誌の性格は、なるべく自由なものに保ち、各人の思うところをそのまま披瀝できるようなものとしておきたい。号を重ねるうちに、自ずと進むべき途は定まるものと思われる。どうかふるって原稿を寄せられ、本誌が有効に活用されるよう、技術職員各位の協力をお願いしたいと思う。

なお、本誌は当センターの関係者以外の方にも、希望があればお頒けしたいと考えている。拙い論考の集積ではあるが、大方の御叱正をいただければ幸いである。

『研究連絡誌』の刊行方針

1. 本誌は上述の趣旨により刊行する。
2. 当面年4回刊行する。
3. 各号4名の執筆とする。
4. 論考の内容は、本県の考古学的資料に関係するもの、当センター調査例に関係するもの等、ひろく考古学全般、埋蔵文化財調査全般に関するものであれば、内容を問わない。
5. 各編、400字詰原稿用紙10枚程度までの分量で、その他に挿図を添付できるが、その総量が400字20枚分を越えないものとする。
6. 本誌は、センター職員以外の方にも希望があれば無料でお頒けする（郵送の時は送料のみ実費をいただく）。また、関係諸機関には別に定める配本計画にもとづき送付する（ただし年1回、4冊同時の発送とさせていただきます）。